



## 復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

イエスは必ず死者の中から復活する

あらためてご復活おめでとうございます。ご降誕とご復活のお祝いは説教を別々に用意しています。朗読される聖書の箇所が違うからです。それで、皆さんご苦労ですが、ご降誕とご復活はそれぞれミサにあずかる意義があると理解して、どちらか片方に参加して良しとするのではなく、夜のミサも翌朝のミサも、両方あずかるようにしてください。苦労して別々の説教を作っていることにも共感してもらえたらと思います。

ところでイエス様は復活して喜ばしいですが、広島カープは復活しますかねえ。復活すると思う人、手を挙げてください。復活すると思っている人はどうも少ないようですね。4月10日のヤクルト戦は参りました。9回終わった時点で3対3だったのに、10回表に12点入れられて、15対3で負けてしまいました。それ以前にも大差で負けたりして、復活の季節に復活をいまだ信じ切れない司祭であります。

与えられた福音朗読は、マグダラのマリアがイエスの納められた墓の様子を、ペトロとイエスが愛しておられたもう一人の弟子に報告に行くところから始まって、二人の弟子がイエスの死者の中からの復活を信じるに至ったという物語です。

物語をよく読むと、もう一人の弟子が先に墓に着いたのですが、墓の中に先に入ったのはペトロでした。それなのに、中の様子を見て、イエスの復活を信じたのは、そのあとに墓に入ったもう一人の弟子のほうでした。この違いはどこにあるのでしょうか。

ここにはっきりとは書かれていませんが、イエスの復活を信じたことができたのは、もう一人の弟子が「イエスが愛しておられた弟子」とあえて書かれているので、イエスの愛が先にあるので、人はようやくイエスの復活を理解し、信じることができるのだと思います。

今年は百人隊長の目線からという切り口でした。百人隊長がイエスの愛に触れ、愛に満たされたかどうか分かりません。「神を賛美して言った。『本当に、この人は正しい人だった』」この描写はありますが、イエスの愛に触れ、愛に満たされたとしたら、もう少し踏み込んだ声を上げたかも知れません。

私たちは空の墓の向こうにある真実を知り、理解し、信じています。イエスは死の枷を打ち砕き、栄光に入られました。「イエスは必ず死者の中から復活されることになっている」（20・9）私たちの信仰です。

エマオの弟子たちのように私たちが希望を失いかけたとき、復活した主はそばにいて力づけてくださいます。ユダヤ人を恐れて家に閉じこもっていた弟子たちのように、素晴らしいカトリックの信仰を固い殻の中に閉じ込めている私のそばに、復活の主はともにいてくださいます。勇気を出して、イエス・キリストを告げ知らせる宣教者となりましょう。